

資料 ⑧

平成23年度キャリアデザイン学会（10月2日開催）  
桔梗課長がパネルディスカッションで発言した  
要旨（8-1-1～8-1-5）

## 本学の震災直後の様子

### 桔梗

初めまして。東北学院大学就職課長をしております桔梗と申します。このようなキャリアデザイン学会にお招きいただき、被災地の状況をということで、お話させていただきますこと、ありがたく思っております。

また、この場をお借りして、被災地へ各大学、各企業、各官庁など、多方面よりご支援、ご尽力いただきましたこと、学生の皆様にはボランティアという形でたくさん応援に来ていただきましたことを感謝申し上げます。ありがとうございます。

それでは本学が、3月11日どのようなことを経験し、どのような対応を側近で行ったかということをお話させていただければと思います。

震災時、本学では、4年生の卒業発表のため全学教授会を行っていました。また、就職部では、最後のチャンスということで、企業をお招きして4年生向けの面接会を14時から行っていました。そして14時46分、あのような想定外の大地震が起きたわけでございます。

学生を安全なところに誘導しなければならぬということで、建物内にいる学生や企業の方を建物の外へ誘導し安否の確認をいたしました。

建物の近くは、教室の窓が布を振るぐらいの勢いで動いており、とても危険に感じました。少し揺れが治まってきてから、学内アナウンスもあり、マニュアル通りの避難場所に全ての学生を避難誘導いたしました。余震も続く中、ひどい寒さと雪と恐怖は言葉に言い表せない状況でした。そのような中、一旦私は事務室内の状況確認のために現場に戻りました。パソコンは吹っ飛び、書籍は散乱し、机の上には落下物が散らかっており足の踏

み場もないような室内の状況でした。それから部下たちのコートや羽織物、置きっぱなしの携帯電話などを持って、再び避難場所に戻り、各自に手渡し、その後の指令が下りるまでみんなで待ちました。体育館の安全確認ができたのを機に体育館への誘導がなされました。自宅に自力で帰れる職員や嘱託職員、学生は帰宅を促しました。帰れるといっても、交通は遮断。外は暗くなる一方、寒さと雪、余震のある中ですから何時に自宅に戻れるかわからない状況でした。これは都内のみな様も同じだったと聞いております。

### 情報が届かない

ライフラインは完全にストップしてしまいましたので、状況確認の情報が中々伝わってまいりません。ただ、ラジオから聞こえてきた情報では、その時200名~300名ぐらいの死者が出たという事でした。何故そのような事態になったのかなどは、全く知りませんでした。地震後に大津波が起きたということを知ったのは、夜半です。想定外の大津波がどんなものか、想像も出来ません。津波に対する認識ですが、沿岸部に居住する限りは地震と津波というのは、ある程度知識を保持しており、危険性を伴うという予測は誰でも持っています。以前にも、沿岸部においては、チリ地震津波や南三陸の志津川の津波を経験していますから、津波に関しての意識は高いと考えられます。しかし今回のような、4階建ての建物まで津波が到達したり、町ごと流されるなどと言うことは、本当に想定外であり、考えられません。中には「津波を見学に行って流されたそうだ」などと、言われたりもしていますが、そのようなことはありません。みなさんが思っているようなことではなくて、大津波が来るという警報とともに旦は逃げたのです。しかし大津波の到着には、地域で時間差がありました。45分ないしは、1時間程の差があったと聞いています。そのた

めに、一旦逃げた人もペットを連れに戻ったり、コートや着るものなど身の回りの物や、これからの生活を考えて通帳やお財布を取りに戻ったり、家族を探しに行った人が、被害に多く合われたと聞いております。本学は、大津波の直接被害はありませんでしたが、学生の尊い命が5名失われました。4名の学生は当日亡くなり、1名の学生は未だに行方不明となっています。

当時の学生総数は12,001名でした。4月に11,933名になり、復学した人も合わせれば現在、11,939名が本学の総数です。4月の入学予定者の中にも死亡学生1名と行方不明学生1名がおりました。

話を戻しますが、帰宅難民となった教職員・嘱託職員・学生と近隣の方たちは体育館に泊りました。次の朝6時頃に仲間の職員が「じゃあ、お先です」と言って帰って行きましたが、住居が流されてしまい跡形も無くなってしまいました。また、息子さんと連絡が取れないと言っていた職員は、息子さんがペットを助けに戻り、亡くなってしまいました。その他にも両親を亡くした職員や学生、家族を亡くされた職員や学生、住居を失ったり、住居の半壊、損壊をした職員や学生、原発で地元に戻れなくなった学生など、多くの犠牲が払われました。私事ですが、我が家の嫁も車ごと大津波の被害に合いましたが、危機一髪、九死に一生で助かりました。

また、震災後のトラウマでカウンセリングを必要とする学生が話しておりましたが、当日「助けて」という声を聞いたか、聞かなかったか。それによって心身のダメージが、違うそうです。そのような学生の心に添いながら就職支援を行ったり、相談を受けたりしています。

現況の被災地は、復興も含め、生きられた者が、生活することに必死になっているのが現実だと思います。

#### 震災の影響による学生の就職先意識変化

#### 桔梗

時期が3月ということで、首都圏における就職活動をしていた学生も随分おりました。

そのような学生の中には、首都圏など県外には就職したくないという考えに変わった人もおりました。原因の一つとして、震災当日、家族と連絡が取れない。取れたとしても帰郷する手立てがない。所持金も少なく宿泊場所も無い。不安と恐怖のギリギリの状態におかれていたのが、一番辛く苦しかったらしく、それがトラウマになってしまったようです。また、大学内では、構内の安全確認を行ったり、学生の安否確認に必死でした。中々学生とは連絡がとれず全学生、12,001名の安否確認が終了できたのは4月半ばでした。

まして学生や学生の家族の現状把握などは、5月9日構内に学生が戻って来てから序々に明らかになってまいりました。

住居を失い、家財も何も無く、携帯電話やもちろんパソコンも無い、エントリーしていた資料も無い、本当に考えられない事態が現実になっておりました。避難所を転々としなければならぬ状況にもなっており、自分の履歴書に記入する住所をどうしたらよいのでしょうか？という相談も実際ありました。また、大学の構内に入れないという時期は、就職活動に対する不安が学生にありましたので、学生職業センターの窓口を利用するように指導しました。

それから私の考えと行動で、これは早急になり過ぎて間違ったとすることがあります。

学生のために、この非常事態ゆえに求人を維持しなければならない、就職先を確保しなければならない、沿岸部の壊滅的状況では企業が失われている。新卒の内定取り消しも少しずつ生じている。東北の学生に求人をなんとかいただきたい。この一念で、早々に各大学や企業の方をお願いをして、首都圏、中部、関西、中・四国、九州などあらゆるところから求人をいただいたり、震災救済求人などの

協力もいただいたりすることで、求人は結構確保されました。

ところが、学生への連絡が通常ではありませんので、連絡が取れないという状況でした。伝えるすべがないのです。また、以前から地元志向の学生が多い中、果たして遠方への就職を求めて行くだらうか？という懸念も出てきました。それに震災後の復興復旧を考えると、若者を地元から外に向けさせることが本当に正しいのか？葛藤が続きました。

## 東北では通信が不能

### 桔梗

震災直後から、ライフラインは全て失われました。携帯電話も使えませんでした。首都圏や西日本の方は、そこまで大変ではなかったかもしれませんが、被災地では情報の把握もできないまま余震と雪と寒さに耐えておりました。近隣で起きている大津波の情報も夜半になるまで、私たちには伝わってない状況でした。

私たちは、構内に残っている学生の安全確保をすることで実際精一杯でした。そのような状況でしたから東京方面で就職活動している学生へ配慮する事までは出来ませんでした。

## 学生の意識の変化、人生観の変化

### 桔梗

今年の学生に意識の変化があるか？ということですが、おそらくあります。

被災に関係なく、就職活動に集中できたという学生も、もちろんたくさんおりました。そのような学生で内定を3つも4つもいただき、早々に就職活動を終えた学生もおります。

しかし、方や、両親や家族を失ったり、住居も全て失ったり、生計維持者が職を失った

り、家族のお骨を5つ抱えアパートに一人で暮らしている学生もいたり、今までの生活が一変していたのです。お骨を抱えている学生はカウンセリングをしながら、今も就職活動をしています。

また、厚労省の就活無料バスや無料宿泊施設の提供などは、首都圏に向けて就職活動している学生への大きな応援となりました。

今年、企業さまから言われたことで「東北の学生は、元気がない」「何かハッキリしない学生が多い」ということでしたが、震災後の2ヶ月のブランクによって、他県の学生との足並みが揃わず萎縮感が生じているような気がします。

学生の中には、被災地における復興の兆しが見えるまでは、地元に残って復興の手助けをしたいというような考えの学生も多くなりました。このような場合には、本社が他県にあるとしても必ず東北地方に支社があるとか、なるべく当初は宮城に勤めていたい。岩手に勤めたい。福島近郊に勤めていたい。そのような願いがあるようです。

想定外の思いもよらぬ事態ということで、すごくたくましくなった学生もいます。全てを失ったことで物の大切さを知り、働くことへの謙虚さなども分かったようです。

一般には、瓦礫といってしまいますが、20何年間の蓄積物、思い出の品、その子たちにとってはかけがえのない歴史なのです。それらを失ったのですから、考えられないくらいのショックだろうと思います。家がないということは、本当に何も無いのです。そのような事態に直面した時に、私たち人間は何をしたら良いのか。ただ、呆然とするのではないかと思います。しかし、生かされた者として、生きなければなりません。“僕たちは助かったのだから、生きていかなければいけないのですね”という声がこの頃学生たちから聞こえてきます。また“就職して働かなければなりません”ということで、再び活動し始めました。しかし企業では、だんだん終

結しましたという報告が届くようになりました。今から活動しなければならぬ学生のためにも、もう少し就職先の確保がこの時期になって必要になりました。先ほど村田さんがおっしゃいましたように、国が早く企業の復興のための支援をしてくれること、明るい兆しが少しでも見えてくること、少しでも働く場所ができてくる必要があります。

避難所で生活したという学生たちは、共同生活する中でコミュニケーションのとり方や助け合う思いやりの気持ちなど、人間がひと回りもふた回りも大きくなった学生もいます。またボランティア活動などで他大学と交流が深まり、新たな視野が広がることも出来て、被災を気に大きく変わることもありました。新入生の話しの中には、友だちを失ったり、家族を失ったり、大切なものを失ったりしたので、大学のこの学部ではしっかり勉強し、将来社会に貢献をしたいと考えております。というような力強い声まで聞かれました。

私たちも、あの時は見知らぬ人との会話が増えましたね。みんなで助け合わなければならぬ、無事の確認を見知らぬ者同士でも行いました。助かってよかったね。このひと言がありがたい会話でした。若い人たちも学生も同じだったと思います。

それが根本的に私たちの忘れていたものと呼び覚ましたような気がいたします。

## 学生の話聞き自信を持たせる

### 桔梗

今までとは違い、学生の就職支援は指導型ではなくなりました。本人たちの話しに傾聴ですね。じっくり耳を傾けて聞いています。

本人たちが色々と話しをすることで、一歩前に進むことが出来ることもあり、心の引き出しを開けてあげることで失いかけた自信を再度奮い立たせることができることもありました。傾聴することが、私どもが今なす

べき大事な役割なのかなと思います。

## 隣県としては気の毒、何とかしてあげたい

### 桔梗

極端な考え方はしていないと思いますが、福島からの求人に対して学生たちが今までのように積極的に応じたりしないことや3月の卒業生で、福島の企業から内定をいただいていたが辞退を申し出たという事例などは少々ありました。避難宣告を要求されている学生たちは、家族とともに仙台の方にマンションを借りたり、アパートを借りたりして引越した例もあります。福島に就職を希望しても、家には戻れない場所もあります。その他に福島県と宮城県の境界区域における風評被害などもあります。私の知り合いで福島の実家が桃を栽培しているのですが、今までとは違い気軽に他人に差し上げる事も出来なくなりましたと、嘆いておりました。生産物が売れない。そのような事態から経済状況にも変化が生じ、震災と原発、大津波の被害で学生は、このまま学業が続けられるか？否か？で深刻な状況になりました。被災地の各大学では、授業料の減免措置や奨学金の制度、学生支援の工夫など、何らかの支援がなされました。構内の被害も相当大変なもので、修復には多大な資金も必要でしたが学生のためということで頑張ってきたと思います。特に福島の大学では新入生を募集するにも苦慮するだろうと心配されています。隣県としては、本当に心苦しいというか、気の毒だというか、なんとかしてあげたいという気持ちです。

## ボランティアの学生と情報交換

## 桔梗

各大学、たとえば事例を申しますと、青山学院大学とか、立教大学、明治学院大学、明治大学、法政大学、東海大学、その他の大学などへ、大学構内の利用やキャリアセンターの利用をお願いしたい旨の発信を行いました。受け入れ側の大学からは、「もちろんご支援申し上げます」と、回答もいただいております。ただ、学生が現実利用するか利用しないかということは不明です。

現に今までも、大学間においては、災害があるなしに関わらず担当者が連絡した上で、資料室を利用させていただいたり、求人票を開示させていただいたりすることは行っておりましたので、引き続き行えると考えております。

学生間においては、ボランティアの学生同士が交流をはかり、活動とともに行うことで、積極的に情報交換が行なわれることで、視野を広げているように見えます。

## 就職セミナーなどの情報公開と学生の交流の場を

### 桔梗

お願いとっていいのかわかりませんが、たとえば私どもの方では8月10日、4年生のために企業を100社集めて、東北の私立大学28校の学生に対して合同企業セミ

ナーを実施いたしました。参加学生は1,000名弱で大変好評でした。

もし今後、東北の学生にも是非という企画がございましたら、情報の公開をもっと実施していただければ、地方の学生にプラスであると思います。

首都圏で開催の就職セミナーへの参加にしても交通費・宿泊費なども考えると就職活動費用が学生を逼迫しています。セミナーの開催や公開討論会を地方で開催していただくとう交流の場が増えることにもなります。

隔たり無く、人と関わりたい、情報を知りたい、みんなと仲良くしたいという気持ちはありますね。学生同士交流の場が持てるチャンスがあればと思います。東日本、西日本の文化が違っていると決めつけ、東西が分かれるのではなく日本は、一つでなければなりません。そのためにも大いに交流し合わなければならないだろうと思います。今後ともよろしく願います。

資料 ⑨

桔梗課長出演のNHKラジオ番組（11月18日収録）

「私も一言！夕方ニュース」現場から一言！イ  
ンタビュー内容

添付：録音CD